

平成23年度採択プログラム 中間評価調書
 博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表]

機関名	京都大学	整理番号	D01
1. 全体責任者 (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) まつもと ひろし 氏名・職名 松本 紘 (京都大学総長)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) あわじ としゆき 氏名・職名 淡路 敏之 (京都大学理事・副学長)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) たから かおる 氏名・職名 寶 馨 (京都大学防災研究所教授(工学研究科社会基盤工学専攻教授))		
4. 類型	D <複合領域型(安全安心)>		
5.	プログラム名称	グローバル生存学大学院連携プログラム	
	英語名称	Inter-Graduate School Program for Sustainable Development and Survivable Societies	
	副題		
6. 授与する博士学位分野・名称	博士(総合学術)、もしくは、博士課程教育リーディングプログラムを修了した旨を学位記に付記		
7. 主要分科	(① 社会・安全システム科学) (② 地域研究) (③ 地球惑星科学) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入		
	環境解析学、環境保全学、環境創成学、土木工学、建築学、総合工学、人間情報学、人間医工学、生活科学、科学教育・教育工学、地理学、人文地理学、哲学、経済学、法学、政治学、社会学、心理学、教育学、機械工学、生産環境農学、農芸化学、森林圏科学、水圏応用科学、社会経済農学、農業工学、境界農学、基礎医学、境界医学、社会医学、看護学、ジェンダー		
8. 主要細目	(①) (②) (③) ※ オンリーワン型は太枠に主要な細目を記入		
	社会システム工学・安全システム、自然災害科学・防災学、地域研究、地理学、環境動態解析、環境技術・環境負荷低減、環境モデリング・保全修復技術、環境材料・リサイクル、環境リスク制御・評価、自然共生システム、持続可能システム、固体地球惑星物理学、気象・海洋物理・陸水学、地質学、構造工学・地震工学・維持管理工学、地盤工学、水工学、土木計画学・交通工学、土木環境システム、建築構造・材料、都市計画・建築計画、流体工学、知能機械学・機械システム、地球・資源システム工学、原子力学、エネルギー学、哲学・倫理学、認知科学、リハビリテーション科学・福祉学、食生活学、科学教育、教育工学、地理学、人文地理学、環境影響評価、環境政策・環境社会システム、植物保護科学、食品科学、森林科学、木質科学、経営・経済農学、地域環境工学・計画学、農業環境・情報工学、環境農学(含ランドスケープ科学)、放射線・化学物質影響科学、統計科学、財政・公共経済、経済政策、経営学、会計学、国際法学、社会法学、国際関係論、社会学、社会福祉学、社会心理学、教育心理学、臨床心理学、教育学、教育社会学、医療社会学、疫学・予防医学、衛生学・公衆衛生学、放射線科学、臨床看護学、高齢看護学、地域看護学、ジェンダー		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	経済学研究科経済学専攻、地球環境学舎全専攻、教育学研究科全専攻、医学研究科医学専攻・社会健康医学系専攻、アジア・アフリカ地域研究研究科全専攻、理学研究科地球惑星科学専攻、情報学研究科通信情報システム専攻・社会情報学専攻、工学研究科社会基盤工学専攻・都市社会工学専攻・都市環境工学専攻・建築学専攻・機械理工学専攻、農学研究科全専攻、防災研究所、生存圏研究所、東南アジア研究所		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名	該当無し		
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名	該当無し		
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)	該当無し		

(機関名: 京都大学 類型: 複合領域型(安全安心) プログラム名称: グローバル生存学大学院連携プログラム)

14. プログラム担当者の構成 計 55 名					
外国人の人数		2 人	[3.6%]	女性の人数	
				4 人	[7.3%]
プログラム実施大学に属する者の割合 [100.0 %]					
プログラム実施大学に属する者			55 人	プログラム実施大学以外に属する者	
そのうち、他大学等を経験したことのある者			41 人	そのうち、大学等以外に属する者	
				0 人	
				0 人	
15. プログラム担当者					
※他の大学等と連携した取組(共同実施を含む)の場合: 基幹大学に所属するプログラム担当者の割合 [%]					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成25年度における役割)
(プログラム責任者) 淡路 敏之	アヲジ トシキ		理事・副学長	海洋物理・気候科学 理学博士	プログラム責任者として学位プログラムの全体運営を遂行し、責任を持つ。
(プログラムコーディネーター) 寶 馨	タカラ カオル		防災研究所・教授 工学研究科・社会基盤工学専攻・教授(協力講座)	防災技術政策・水文学・極値統計学 工学博士	プログラム教授会：複合型リーディング大学院(安全安心)の総括
矢守 克也	ヤモリ カツヤ		防災研究所・教授 情報学研究科・社会情報学専攻・教授(協力講座)	社会心理学・防災心理学 博士(人間科学)	入進学審査委員会：プログラム運営および情報学研究科との連携強化・調整
角 哲也	スミ テツヤ		防災研究所・教授 工学研究科・都市社会工学専攻・教授(協力講座)	水工水理学 博士(工学)	渉外委員会：水資源リスク及び水資源システムのサステナブルマネジメント
堀 智晴	ホリ トモハル		防災研究所・教授 工学研究科・都市社会工学専攻・教授(協力講座)	水資源工学・水文学 博士(工学)	大学院連携教育カリキュラム委員会：eポートフォリオ担当
(平成25年4月1日追加) 中川 一	ナカガワ ヒロシ		防災研究所・教授 工学研究科・社会基盤工学専攻・教授(協力講座)	河川防災システム 博士(工学)	大学院連携教育カリキュラム委員会：国際共同プロジェクト・フィールド実習担当
中島 正愛	ナカシマ マサヨシ		防災研究所・教授 工学研究科・建築学専攻・教授(協力講座)	耐震工学・鉄骨構造 Ph. D.	プログラム教授会：プログラム運営および防災研究所との連携強化・調整
川瀬 博	カワセ ヒロシ		防災研究所・教授 工学研究科・建築学専攻・教授(協力講座)	地震工学・災害管理 学 博士(工学)	渉外委員会：都市域における地震災害管理学
MORI, James Jiro	モリ ジェームズ ジロウ		防災研究所・教授 理学研究科・地球惑星科学専攻・教授(協力講座)	地震学 Ph. D.	プログラム教授会：海外フィールド実習、国際スクール、実践英語指導
石川 裕彦	イシカワ ヒロヒコ		防災研究所・教授 理学研究科・地球惑星科学専攻・教授(協力講座)	気象災害・水循環 博士(理学)	入進学審査委員会：気象水災害の科学理解と社会適応
津田 敏隆	ツタ タシカ		生存圏研究所・教授 情報学研究科・通信情報システム専攻・准教授(協力講座) 理学研究科・地球惑星科学専攻・教授(協力講座)	大気圏科学 工学博士	プログラム教授会：プログラム運営および生存圏研究所との連携強化・調整
塩谷 雅人	シオタニ マサト		生存圏研究所・教授 理学研究科・地球惑星科学専攻・教授(協力講座)	大気科学・衛星リモートセンシング 理学博士	プログラム教授会：大学院連携教育カリキュラム委員会委員長、eポートフォリオ担当
橋口 浩之	ハシグチ ヒロユキ		生存圏研究所・准教授 情報学研究科・通信情報システム専攻・准教授(協力講座) 理学研究科・地球惑星科学専攻・准教授(協力講座)	レーザー大気物理学 博士(工学)	リーダー育成支援委員会：地球大気観測技術の理工融合研究と国内外フィールド実習
矢野 浩之	ヤノ ヒロユキ		生存圏研究所・教授 農学研究科・森林科学専攻・教授(協力講座)	生物機能材料・セルロース/コンポジット 農学博士	プログラム教授会産業界との協働に関する調整、木材資源と地域社会の持続可能性
梅澤 俊明	ウメザワ トシアキ		生存圏研究所・教授 農学研究科・応用生命科学専攻・教授(協力講座)	植物代謝機能化学 農学博士	渉外委員会：産業界との連携、森林資源の持続可能性

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成25年度における役割)
依田 高典	イダ タカノリ		経済学研究科・経済学専攻・教授	行動経済学 博士(経済学)	プログラム教授会：プログラム運営および経済学研究科との連携強化・調整
澤邊 紀生	サワベ ノリオ		経営管理研究部・教授 経済学研究科・経済学専攻・教授(協力講座)	会計学 博士(経済学)	渉外委員会：組織・ネットワークにおける国際・地域リーダー育成
勝見 武	カミ タケ		地球環境学堂・地球親和技術学廊・教授	地盤工学 博士(工学)	プログラム教授会：プログラム運営および地球環境学堂との連携強化・調整
ショウ ラジブ	ショウ ラジブ		地球環境学堂・地球親和技術学廊	国際環境防災マシ ン博士(理学)	渉外委員会：実践英語教育と国際コミュニケーション能力開拓
(平成24年4月2日追加) 鈴木 晶子	スズキ ショウコ		教育学研究科・教育学専攻・教授	教育哲学 文学博士	渉外委員会：安全安心教育に関する国際連携
皆藤 章	カイトウ アキラ		教育学研究科・臨床教育学専攻・教授	臨床心理学 博士(文学)	プログラム教授会：プログラム運営および教育学研究科との連携強化・調整
高橋 靖恵	タカハシ ヤスエ		教育学研究科・臨床教育学専攻・准教授	臨床心理学 博士(教育心理学)	リーダー育成支援委員会：安全安心の心理学およびジェンダー問題
小池 薫	コイケ カオル		医学研究科・医学系専攻・教授	救急医学、災害医学、 外傷学、熱傷学 博士(医学)、博士 (薬学)	大学院連携教育カリキュラム委員会：災害緊急医療および放射線被ばく医療に関する国際共同プロジェクト
小泉 昭夫	コイズミ アキラ		医学研究科・社会健康医学系専攻・教授	公衆衛生学 医学博士	プログラム教授会：プログラム運営および医学研究科との連携強化・調整
木原 正博	キハラ マサヒロ		医学研究科・社会健康医学系専攻・教授	社会疫学 医学博士	プログラム教授会：渉外委員会委員長、産官学連携プロジェクト担当
木原 雅子	キハラ マサコ		医学研究科・社会健康医学系専攻・准教授	社会疫学・予防介入学 医学博士	渉外委員会：感染症と社会の安全安心、ジェンダー問題
西淵 光昭	ニシヅチ ミツアキ		東南アジア研究所・人間生態相関研究部門・教授 医学研究科・社会健康医学系専攻・教授(協力講座)	病原細菌学 Ph. D.	プログラム教授会：アジアから広がる感染症に関するグローバルな視点での教育
竹田 晋也	タケタ シンヤ		アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア地域研究専攻・准教授	森林資源管理 農学博士	大学院連携教育カリキュラム委員会：産学連携プロジェクト担当
古澤 拓郎	フルザワ タクロウ		アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア地域研究専攻・准教授	人類生態学・地域研究 博士(保健学)	リーダー育成支援委員会：熱帯・オセアニア地域の感染症・生活習慣病に関するフィールド教育・安全安心社会と健康問題
重田 眞義	シゲタ マサヨシ		アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ地域研究専攻・教授	アフリカ地域研究 博士(農学)	プログラム教授会：プログラム運営およびアジア・アフリカ地域研究研究科との連携強化・調整
伊谷 樹一	イタニ ジュイチ		アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ地域研究専攻・准教授	アフリカ地域研究 博士(農学)	入進学審査委員会：アフリカ農業の生産性と持続可能性に関する開発理念
河野 泰之	コノ ヤスユキ		東南アジア研究所・統合地域研究研究部門・教授 アジア・アフリカ地域研究研究科・グローバル地域研究専攻・教授(協力講座)	東南アジア地域研究 農学博士	プログラム教授会：プログラム運営および東南アジア研究所との連携強化・調整
平原 和朗	ヒラハラ カズロウ		理学研究科・地球惑星科学専攻・教授	固体地球物理学・地震学 理学博士	大学院連携教育カリキュラム委員会：eポートフォリオ担当
余田 成男	ヨテン シゲオ		理学研究科・地球惑星科学専攻・教授	気象学 理学博士	プログラム教授会：入進学審査委員会委員長、理学研究科のカリキュラム調整

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成25年度における役割)
平島 崇男	ヒラジマ タカオ		理学研究科・地球惑星科学専攻・教授	岩石学・地質学 理学博士	プログラム教授会：自然災害を引き起こす理学的基礎概念
松野 文俊	マツノ フミトシ		工学研究科・機械理工学専攻・教授	ロボット工学 工学博士	リーダー育成支援委員会：災害ロボットシステムに関する産学連携推進
細田 尚	ホシダ タカシ		工学研究科・都市社会工学専攻・教授	水工水理学・河川工学 工学博士	入進学審査委員会：津波災害・洪水災害と減災、温暖化による湖沼等の水環境変化対策
清野 純史	キヨノ ジュンシ		地球環境学堂・資源循環学専攻・教授	地震工学、ライフライン工学 博士(工学)	プログラム教授会：リーダー育成支援委員会委員長、研究活動経費・特待生奨励金担当
藤井 聡	フジイ サトシ		工学研究科・都市社会工学専攻・教授	土木計画学 博士(工学)	プログラム教授会：生存学の社会科学的展開
木村 亮	キムラ マコト		工学研究科・社会基盤工学専攻・教授	地盤工学・基礎工学・土木工学・国際技術協力・農村開発 博士(工学)	プログラム教授会：コミュニケーションインフラ整備に関する海外フィールド実習
立川 康人	タチカワ ヤスト		工学研究科・社会基盤工学専攻	水文学 博士(工学)	大学院連携教育カリキュラム委員会：水循環・物質循環に関する工・理・農学際教育、フィールド実習
(平成23年12月7日追加) 原田 和典	ハラダ カズノリ		工学研究科・建築学専攻・教授	都市空間工学 博士(工学)	大学院連携教育カリキュラム委員会：建築物や生活空間における学際教育、eポートフォリオ担当
(平成23年12月7日追加) 高野 裕久	タカノ ヒロヒサ		工学研究科・都市環境工学専攻・教授	環境医学 博士(医学)	リーダー育成支援委員会：環境物質の人体影響に関する教育
(平成23年12月7日追加) 高岡 昌輝	タカオカ マサキ		地球環境学堂・地球益学専攻・教授	環境デザイン工学 博士(工学)	渉外委員会：廃棄物処理・処分、微量有害重金属の発生源対策に関する教育
奥本 裕	オクモ ユカ		農学研究科・農学専攻・教授	遺伝子・体・日長反応 博士(農学)	渉外委員会：世界の穀物生産における育種技術の重要性
白岩 立彦	シライワ タツヒコ		農学研究科・農学専攻・教授	作物学 博士(農学)	大学院連携教育カリキュラム委員会：作物の生産性における環境・遺伝子相互作用のフィールド実習
神崎 護	カンザキ マモル		農学研究科・森林科学専攻・教授	熱帯森林生態学・森林土壌学 理学博士	大学院連携教育カリキュラム委員会：生物多様性の観点からの森林フィールドにおける生存学
水山 高久	ミズヤマ タカヒサ		農学研究科・森林科学専攻・教授	森林科学・山地保全学 農学博士	入進学審査委員会：山地保全に関するフィールド研究
間藤 徹	マイトウ トオル		農学研究科・応用生命科学専攻・教授	食物栄養学 農学博士	大学院連携教育カリキュラム委員会：食料安全保障分野における産学連携プロジェクト担当
(平成24年4月2日追加) 高野 義孝	タカノ ヨシタカ		農学研究科・応用生物学専攻・准教授	食物病理学 博士(農学)	リーダー育成支援委員会：生存基盤食料学に関する教育
谷 誠	タニ マコト		農学研究科・地域環境科学専攻・教授	森林水文学 農学博士	リーダー育成支援委員会：プログラム運営および農学研究科との連携強化・調整
清水 浩	シミス ヒロシ		農学研究科・地域環境科学専攻・教授	農業システム工学 博士(農学)	渉外委員会：作物生産における環境変動の重要性と植物工場の可能性
栗山 浩一	クリヤマ コウイチ		農学研究科・生物資源経済学専攻・教授	環境評価・生物多様性・流域管理 博士(農学)	プログラム教授会：広報委員会委員長、ニュースレター・ホームページなどによる情報発信

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担 (平成25年度における役割)
(平成24年4月2日追加) 入江 一浩	イリエ カズヒロ		農学研究科・食品生物学専攻・教授	生物生産科学 農学博士	入進学審査委員会: 生存基盤食料学に関する教育
(平成25年10月1日追加) 北島 薫	キタジマ カオル		農学研究科・森林科学専攻・教授	植物生態学 Ph. D.	リーダー育成支援委員会: 森林環境保全の実践科学 のフィールド実習

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

【人材育成面の目的（どういう人を育てたいか）】

現代の地球社会は、①巨大自然災害、②突発的人為災害・事故、③環境劣化・感染症などの地域環境変動、④食料安全保障、といった危険事象や社会不安がますます大きく、かつ、広がっている。本学位プログラムでは、「グローバル生存学」という新たな学際領域を設定し、

- (1) 人類が直面する危機を乗り越え、人間社会を心豊かにし、その安寧に貢献するという使命感・倫理観にあふれた人材
- (2) 自らの専門性に加えて幅広い視野と知識・智慧によつて的確に対策を行うことのできる判断力・行動力を備えた人材

を育成する。本プログラム修了者は、

- 一級の研究者・教育者であり社会・安全システム科学分野におけるアカデミック・リーダー
- 国際機関などで世界をまたにかけて活躍する国際的な危機管理リーダー
- 災害・事故や経済危機に的確に対処し、企業経営を安定的・持続的に進める企業リーダー
- 食料・資源・エネルギーなどの安全保障政策の決定に指導力を発揮する国や地域のリーダー
- 科学的知識に基づき社会に不安を与えない正しい情報を伝えるサイエンス・コミュニケーター

などであつて、各方面で世の中を支えし良い方向に動かしていくことのできる「人財」である。

【教育組織面の目的（どういう教育方法・組織としたいか）】

こうした人材育成のため、実際の事例研究を重視した教育方法をとる。いわゆるケース・メソッド (CM) や問題 (プロジェクト) 解決型学習 (PBL) という方法を適用し、**安全安心分野における現場主義・対話主義を基調とした人材育成の新しい「京大モデル」を確立**する。総合大学の長を生かし、9つの大学院と3つの附置研究所が連携し、単独の大学院・専攻では実現できない学際融合的な体制 (大学院連携) の中で優れた教育・研究を展開して、有能な学生自らが育っていく環境を整える。

ここで述べたような人材は、種々の災害・事故リスクをもつて日々活動している産業界、基礎科学に基づく実践科学を体系化し社会に役立てようとする研究者や学界、さらには、人命と資産、さらには生活、健康及び精神の安定を守ることが使命の一つである国レベル・地方レベルの行政組織、マスメディア、いずれにおいても大いに必要とされている。

本プログラムでは、以下の2つの課題を解決しようとする点に特色がある。

課題1 (「博士」は有用か?): 一般に、博士課程を修めて博士号を取得した者は、深い専門性をもつものの、往々にして視野が狭く、社会との協調性が欠如していたり、実務現場との乖離があつたりするなどの難点が指摘されることがある。高度で先端的な研究の推進は当該学問領域の進歩に貢献するが、それを社会の福利や進歩にも結びつけるような努力が大学として大学院として必要である。

課題2 (多様な安全安心問題解決のための大学院教育は?): 人類社会の生存や安全安心を脅かす次のような問題を扱う。(a) 大地震による大津波が広範な国土や対岸の国々に被害を与える、(b) 火山噴火や森林火災が大気を汚染し航空航行を妨げ各国の経済活動に打撃を与える、(c) 地球温暖化現象が洪水を巨大化させ渇水や熱波を長期化させ人命被害、環境劣化、農業生産被害をもたらす (食料安全保障と直結)、(d) 化学工場や原子力発電所が被災し有害物質が拡散し健康被害と社会不安を引き起こす、(e) 越境する病原菌・ウイルスによつて深刻な感染症が拡大する。これらの問題解決には、学際的・複合的アプローチが必要である。これを総合的に取り扱う教育方法や教育研究組織が確立されていない。

京都大学は、1897年 (明治30年) の開学以来、総合大学としてその体制を整え、10の学部、17の大学院研究科と専門職大学院、14の附置研究所、20の教育研究施設を有する。現場主義・対話主義の自由な学風を持ち、多彩な人材を輩出してきた。大学院の教育面でも、21世紀COEプログラム (23拠点)、グローバルCOEプログラム (13拠点) を実施するなど、大学院改革のあり方についていくつかの新しい試みを続けてきている。平成22年3月に発足させた学際融合教育研究センターにおいて、グローバル生存学大学院連携ユニットを平成24年2月に設置し、本プログラムの学際連携的な運営を実現している。

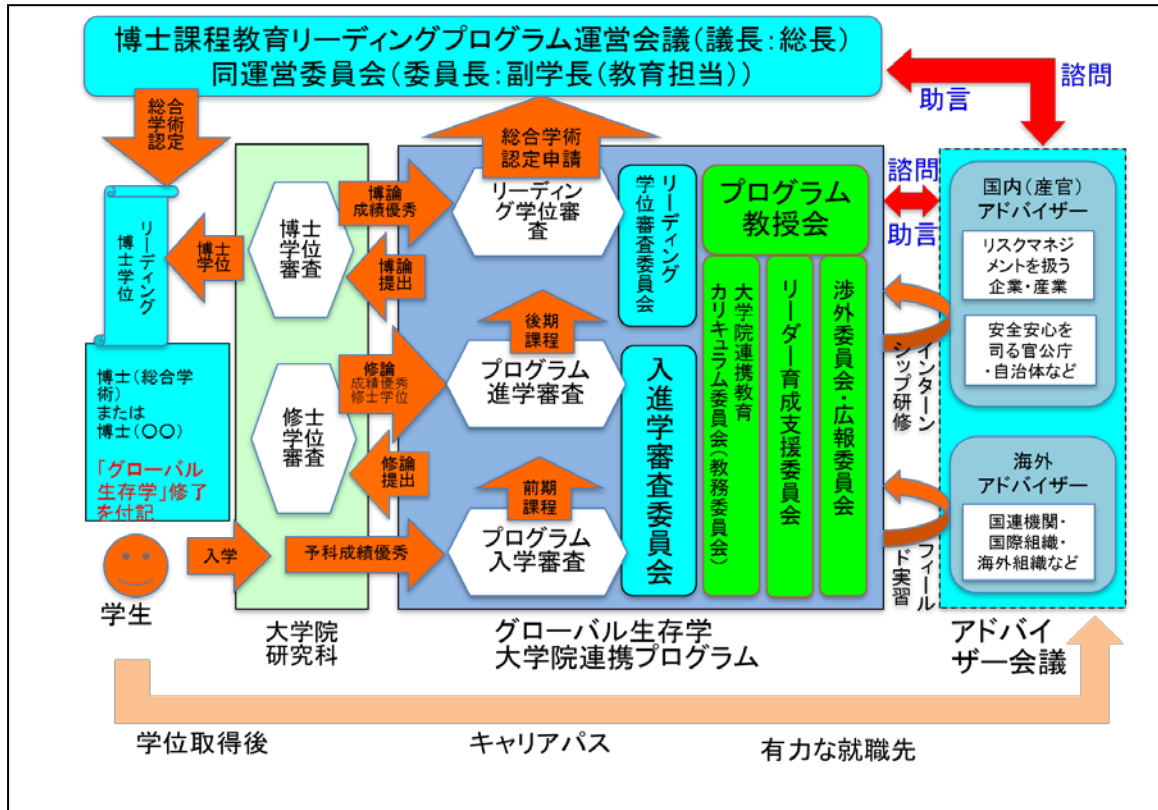
また、安全安心に直接関連する部局としては、開学直後から存在する地球工学系、物理工学系、建築学科、経済学部とそれらの大学院、医学部・医学研究科と附属病院、理学研究科の地球惑星科学専攻、農学研究科、1951年に発足し60年に及ぶ歴史を持つ防災研究所、教育学研究科、1998年設置のアジア・アフリカ地域研究研究科、情報学研究科、2002年に設置された地球環境学堂・学舎、2004年改組により発足した東南アジア研究所と生存圏研究所など、我が国の大学教育・研究をリードしてきた部局を多数擁している。よつて、安全安心分野で大学院教育を行う本学の優位性は極めて高い。

学位プログラムの概念図

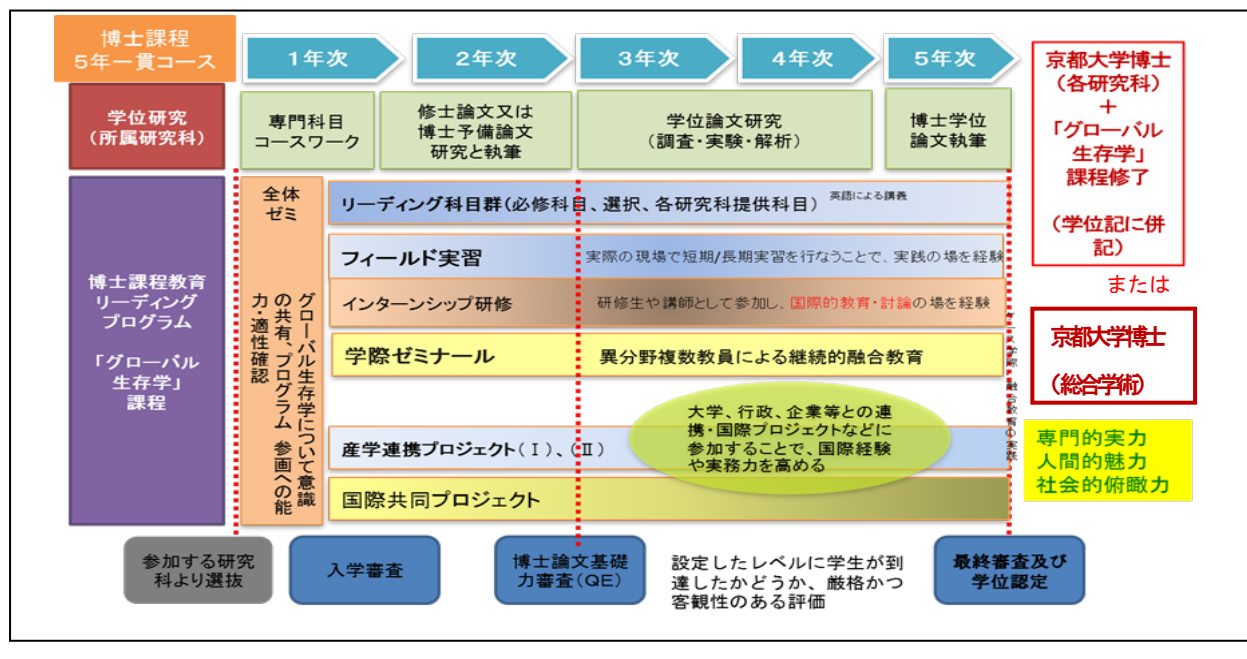
(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、学位プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)

グローバル生存学大学院連携プログラムの組織と学生の履修の流れ (オレンジ色の矢印)

質保証は各審査において行われる。成績優秀な場合にのみプログラムの次の段階に進める。



プログラム5年間の履修の例示



「博士課程教育リーディングプログラム」中間評価結果

機関名	京都大学	整理番号	D01
プログラム名称	グローバル生存学大学院連携プログラム		
プログラム責任者	北野 正雄	プログラムコーディネーター	寶 馨

(評価決定後公表)

(総括評価)

一部で計画と同等又はそれ以上の取組もみられるものの、計画を下回る取組であり、本事業の目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要である。

[コメント]

リーダーを養成する学位プログラムの確立については、未だ形成途上と判断される。グローバル生存学を構成する複数の概念が、全体として安全・安心の実現にどのように寄与するのか、その枠組みは従来の他のアプローチ（例えば防災学）とはどう異なるのか、といった本プログラムの領域に固有の体系的な枠組みを構築することが急務である。

産学官民参画による修了者のグローバルリーダーとしての成長及び活躍の実現性については、多様な専攻、研究科から専門の異なる学生が参加し自主的に活動する機会が設けられているほか、インターンシップ、海外研修等、多くの活動が準備されていることは評価できるが、今後の海外の大学との共同研究や産業化に結びつく事業の実施、ネットワーク形成などの積み重ねにより、プログラム修了後の活躍につながることを期待したい。

グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の整備については、総長をトップとする全学体制を構築し、質の高い研究者の参画とともに、企業や国際機関との積極的な交流により、学生の選択肢が広がる様々な取組を行っていることは評価できる。

世界に通用する確かな質保証システムについては、大学院1年次(L1)の最初の学期を予科と位置づけ、この予科のプロセスで選抜された学生のみを本科生とする2段階選抜方式により質の保証を図るとともに、多様な背景を持った優秀な学生の確保はなされていると判断できる。しかし、応募者数は減少傾向にあり、今後とも多くの優秀な学生が獲得できるよう更なる努力が望まれる。

事業の定着・発展については、「グローバル生存学」のアイデンティティとフレームワークの確立によることから、それらの早急な体系化が求められる。その際、例えば京都大学の知的な伝統である人文科学研究所方式を活用し、プログラム担当者が率先して、多分野横断的かつ学際的な相互討議を深めるなど、関係する教員間での総合討論、学生を含めた更なる検討が必要である。